

『ちゅーりっぷ×わんだー！くキスしないと出られない部屋』

特典シナリオ台本

【登場人物】

金城カスミ KINJO KASUMI (20)

「私」の恋人。大学二年生。

高校時代から私のことを気にかけていたが、きっかけを掴めずにいた。大学に入って距離が近づき、一年の友人関係を経て交際に発展した。現在付き合ってから半年になる。

明るく元気で、時には大胆な性格。

だが恋愛には疎く、実は奥手。（「私」がはじめての恋人）

キスやスキンシップに興味はあるものの、

あまり回数は重ねられていない。その事実には少し悩み中。

好奇心旺盛であり、

突然部屋に閉じ込められたこの状況を前向きに捉えている。

年齢…20歳 身長…156センチ

バスト…E 血液型…AB型

【あらすじ】

気がつく、「私」は見知らぬ真っ白な部屋で倒れていた。

自分が何者なのか、どうしてここにやってきたのか、思い出せない。

見ると、同じ部屋にはもう一人、綺麗な女の人が倒れていた。

「金城カスミ」と名乗る彼女は、

ここに来た経緯は覚えていなかったが、記憶はあるようだった。

部屋の扉には鍵がかかっておりどうやら閉じ込められているようだ。

脱出のためには、紙に書かれたミッションをクリアしないといけないのだが、それは「私とカスミがキスをする」という内容で…?!

「キスしないと出られない部屋」に閉じ込められた二人の様々なキスシチュエーションを楽しめる百合音声作品です！

【プロローグ】

○白い部屋

暗闇の中、どこから遠くから呼吸音が聞こえる。
呼吸音がだんだんと近づいてくる。

「私」は目が覚める。

その呼吸音の正体が隣で寝ている少女（カスミ）だと気付く。

「（私が起きたことに気付いて） ……ん、んんっ ……」

カスミ、ゆっくり目を開けて、「私」の存在に気付く。

「（起きたての声で） ……おはよー。 ……今、何時だろ」

カスミ、あたりを見渡す。

「……ん？ ん？ ……え？ ……は？」

「……ここ ……どこ？」

「昨日ふつーにうちのベッドで寝てたはずだけど…。
（自分の姿をみて） うん、パジャマだ…」

「（思い出しながら） えー……。 たしか昨日は…
バイト終わりにファミレスで合流してー。
一緒にご飯食べて…。」

それから帰ってドラマ見て…。」

「……そんな感じだったよね？」

「……ん？ なに、その顔」

「……うん。……うん？
えっ、ちょっと」

「え、……ウソ、うそでしょ？
……何にも覚えてないの？
ほんとに？ 何も？」

「……うん。」

私のことも……？ わかんない……？」

「（ここにくるまでの記憶がないという話を聞いている）
……うん。……うん。
……そう。記憶がないってこと……？」

「あ？ なるほど。
これ夢だ。ほっぺをつねろう」

「（自分のほっぺを抓って）……いたい。
……最近の夢は、痛みまでリアルだなあ……」

「（少し落ち込み気味で）ううう……。
起きたら知らない部屋で？
彼女は記憶がなくて……どんな状況よ……」

私、カスミの背中をさすってあげる。

「……ううん、大丈夫。
何も悪いことしてないから。
私がいよいよ、混乱してるだけ……」

「…ありがとう。」

記憶がなくても優しいところは変わらないね」

「（ため息）はあー……。…」

（息を吸って）すうううっ…。

（ため息）はあああー……。…」

「よし！ 切り替えた！

まー、悩んでもしかたないし！」

「私、金城カスミ。大学二年生。

あなたと同じ歳で、同じ大学に通ってる」

「そして、あなたは私の……。…」

「（何かに気付いて）ん？ 待って。

あれ、あそこになんか、紙みたいなの貼ってある」

カスミ、貼ってある紙のもとへ移動する。

「（呟くように）…何か書いてある。

（壁から紙を剥がして）あ、ちょっと端破れた」

カスミ、紙に書いてあることを読みながら戻ってくる。

「えーっと？（読みながら）

突然ですがあなたたちはこの部屋に閉じ込められました…？」

「これからあるミッションに挑戦してもらいます。

見事クリアできたら、部屋の扉が開いて外に出られます…？」

「（一度紙から目を離して）

…ど、どういうこと？」

「…まだ続きがある」

「（読みながら）このミッションは、お二人により親密により濃厚にラブラブな関係になって頂くのが目的です」

「ミッションは、ラブラブになるためのスキンシップ
かつこ、キス多め、かつことじ。で構成されています」

「…つまり、ここは『キスしないと出られない部屋』です……?!」

「……ミッション…今すぐキスしてください」

「（間・みつめあう）……」

「……あー……。なんか、大変だ、これは……」

「そ、そんな、

いきなりキスしろなんて言われても、ねえ？（確認するように）」

「扉、開かないかな…?」

カスミ、部屋の扉まで歩いていく。
ドアノブをガチャガチャする、が開きそうにない。

「やっぱりダメかあ…」

カスミ、あなたのもとに戻りながら

「んー……。」

（見回して）この部屋、他に出られそうなどこないし……。

……従うしかない、かも」

「（ちょっと恥ずかしそうに）

ま、まあ、一回キスすればいいわけだし…!」

カスミ、私の肩を掴み、向かい合う。

「（緊張の間）……。

記憶がない状態で不安かもしれないけど…。
大丈夫だから」

「……おでこ、あげて？」

カスミ、私のおでこにキスをする。

「（私から離れて）……はい。

…じゃあ、出ようっ」

カスミと私、部屋の扉まで歩いていく。
ドアノブを引くがびくともしない。

「あれ……あかない」

「キスしたよね？」

……もしかして、おでこじゃだめってこと？」

「もー……！

ごめん！ もう一回してもいい……？」

「……うん。

…今度は口に……」

「（様子をみて）……ん？ どうかした？」

「……あ、そっか。今、記憶ないから、
ファーストキスになっちゃうのか……」

「……初めてじゃないよ、私たち」

カスミ、ちょっと強引に私にキスをする。
ドアの施錠が解除される音が響く。

「（口を離して）……あ！今、音したよね？
開いたってことかな…？」

「ん、あ…。あー……」

その、はじめてじゃないっていうのは…」

「実は私たち、…付き合ってるんだよねえ。

…うん、そう。

…私はあなたの恋人、ってこと」

「……はい。

そうなんです……」

もう半年くらいになるかな…？ 付き合って」

「今までも何度かキスしてる。

（ぼそと）…さっきのはかなり久しぶり、だったけど」

「ちなみにさっきのキスで記憶が戻ったりとかは……。
ないよねえ」

「とりあえず、扉開いたし、これで脱出できるね」

「…うん。そうだね。

色々あるけど、ひとまず外でよっか」

カスミと私、部屋の扉を開けて次の部屋に行く。

【STAGE01：ロッカー・ロック・キスマイン】

○白い部屋（中央にロッカー）

部屋を移動した二人。

先程と同じような白い部屋だが、
中央にはロッカーがぼつんと立っている。

「……あれ？」

え、また部屋？

さっきので終わりじゃないの？」

「……たしかに。」

むしろここから本番って感じだったり……」

「うん。」

さっきと似たような部屋だけど……」

「真ん中に何かある……。
なんだろ……？」

カスミと私、近づいてみる。

「んー、なんで？」

これ、掃除用具入れ、というかロッカー？
なんでここに？」

「（触りながら）あ。

あけたら、何か起きるとか……？」

カスミ、ロッカーを開ける。

「ん…？…あ、また紙が貼ってある」

カスミ、ロッカー内に貼ってある紙を剥がす。

「（読み上げて）ミッション…ロッカーの中に入って
イチャイチャしながらキスしてください…」

「イチャイチャしながらキスしてください…?!」

「って、言った？ 今、私…？」

「（すこし嬉しそうに）え、いや、なんか…。
ううん、なんでもない」

「……そ、そうだね。
一旦、入ってみよう」

カスミと私、ロッカーの扉を開けて中に入る
（カスミが先行して入る）

「失礼しますー。
うわー……さすがに狭い…」

私が入ってくる。

「お…お…？ 大丈夫？
入れそう？」

密着した状態になる二人。（カスミの息遣いが聞こえる距離）

「（密着へのリアクション）ん…！ ふふふっ、ちかいちかい！（笑）」

「（私の様子を伺いながら）入れた？
よし、じゃあ閉めるよ」

カスミ、扉を閉める。

扉を閉めると周りから学校の音が聞こえ始める。

「え？

ちょ、ちょっと、なに？」

カスミ、扉を開ける。

「……止まった。

なんの音？」

カスミ、扉を閉める。

扉を閉めると周りから学校の音が聞こえ始める。

「わ、また鳴ったっ」

「（しばらく聞いて）

これ、教室の音？」

「……うん。

学校の中にあるロッカー、みたいな演出なのかも……」

「（カスミの息遣いの間があって）

暑い……。

もう、ぎゅうぎゅう（笑）」

「……イチャイチャって、何したらいいんだろ……」

「……イメージ？」

……こう、腰に手を回して……抱き寄せて……
ぴったりくっつく……みたいな」

互いに心音が聞こえるくらいの距離。

「（雰囲気が変わって、ちょっとした沈黙）」

「（頭を撫でながら）」

……ほんと、暑いね。ここ。

なんか、あたま、ぼーっとしてくる…」

カシミ、私にキスをする。

（長めのキスを2、3回。リアクション入れつつ）

「んっ……。」

（くちびるを離して）はあ……。

…ごめん、汗かいてきちゃってる」

「え、そっちは？」

（背中を撫でながら）背中……。

（悪戯な間を入れて）……濡れてる」

「ふふふっ、だって本当に濡れてるんだもん！」

「ほら、『（ふざけて）…濡れてるっ』

ふふふっ、今のはやりすぎだね（笑）」

「……そうだね。

ドア開く音しないし……。

まだ終わってないっぽい」

「…それってさ、もうちょっと……ってことだよね？」

「（間）……ねえ、脱いでもいい？ 上だけ」

「…うん。暑いのもあるけど、

もっと親密に、とか書いてあったでしょ？」

カスミ、服を脱いでいく。

「肌をくっつく感じにすればさ……。
(ちょっと笑って) なんて、安易……?」

カスミ、服を脱ぎきる。

「……そっちも、試してみる?
手伝ってあげる」

カスミ、私の服を脱がせる。
ボタンを上から一つずつ外していく。

「(ボタンを取りながら) ……ん?
あー、はじめて会ったのは、高校の時。
高一、同じクラスで……」

「(ボタンに苦戦して) あれ、なんか滑……。
あ、とれたとれた」

「……うん、席が近かったのもあってよく喋ってた。
……そうだね、まだ友達って感じだった」

ボタンが全てとれて私、服を脱がされる。

「はい。……キャミソールも……とる?」

私、キャミソールも脱がされる。

「……。
ふざけて一緒にロッカーに入ったことあってさ、昔。
こんなふうに。
その時かも、意識し始めたの……」

「……。ねえ」

カスミ、私にキスをする。

「（口を離して）……すごい状態、だね」

カスミ、私にキスをする。

「……うん、なんか、入っちゃったかも。

……だって、好きな子と一緒に。こんな近くで……」

カスミ、私を抱き寄せて長めキスをする。

「目、潤んでる？

……そんなことない？」

カスミ、キスをする。

「……かわいい」

ドアの施錠が解除される音が響く。

ロッカーの扉が開く。

それと共に、クラスの音がフェードアウトしていく。

「（息を大きく吸って）

ふわあ……！

……あ……！……あ……あ……！」

座って休憩する二人。

「ふう……すずしい……」

「（私が脱いだ上の服を渡して）
あ、脱いだの、はい」

「……汗で濡れてる服もう一回着たくないなあ。
でも、これしかないし」

「ねー、着替えたい……」

カスミと私、濡れた服を簡単に羽織る。

「（一息ついて）……はあ」

「……。たしかに、イチャイチャしたね。
うん、これは……自分たちでもわかる」

「（ぼそっと）……やばかった」

カスミと私、部屋の扉を開けて次の部屋に行く。

【STAGE02：きみと揺れるバスルーム】

○白い部屋（中央にバスタブとシャワー）

部屋を移動した二人。

相変わらずの白い部屋。

中央にはバスタブ・その周りにはシャワーや椅子など、風呂場のような設備が設置されている。

「また似たような部屋……。」

真ん中にまた……。え、うそ！」

カシミ、テンションが上がって私の肩をばしばし叩く

「ねえねえ！ ちょっと！」

あれ、お風呂じゃない？ バスタブ！」

カシミ、バスタブまで走る。

「やっぱりそうだ！」

あ、シャワーもある！ ほらみて？」

「わー！ タイミングばっちり！」

汗かいてて気持ち悪かったし！」

「お風呂♪ お風呂♪」

「ん……？ なに？」

なんか、モジモジしてる……？」

「ん？ あ。

（バスタブに貼ってある紙を見つけて）……また紙が」

カスミ、貼ってある紙を剥がす。

「（読み上げて）

ミッション…お風呂に入ってイチャイチャしながらキスしてください」

「……そうなるかあ…。

そうなるよねえ（笑）」

「まあ汗流せるのはいいよね…！

早くシャワー浴びよっ！」

カスミ、自分の服を脱いでいく。

私も服を脱いでいく。

「（私の服を受け取って）脱いだ服は、どうしよ」

「（ちょっと離れた場所で）濡れなさそうな…

この辺に置いておくねー！」

私、シャワーを出す。

「（戻ってきて）あ、シャワー、どう？
ちゃんと出てる？」

「温度…（触って）…うん、いいでしょう」

「じゃあ、後ろ向いてー。
…うん、流してあげる」

カスミ、私にシャワーを当ててあげる。

「どう？きもちい？」

「前に一緒にお風呂入ったのは…いつだったかな？全然経験ないんだよね。付き合ってから一回あったくらい？」

「…うん。うん。」

お風呂ってさ、一緒に入りたいタイプと、ひとりになりたいタイプいるじゃない？」

「（考えながら）私は、相手に合わせるけど……。んー」

「あ、シャワーもいい？じゃあ湯船どーぞ」

私、湯船に入る。

カスミ、自分でシャワーを浴びていく。

「ふわあああ、あー、これこれ。私はこれ待ってたー」

「…どう？湯加減は？ちょうどいい？ふふっ、溶ける？」

カスミ、シャワーを止めて、湯船に入ろうとする。

「はいれるかな…？（足を入れていく）よっ、ほっ」

カスミ、湯船に足を入れていく。

「おっ、いけるいける。」

（沈んでいく）あー…」

カスミと私、湯船に入った状態になる。

「(気持ち良いため息)」

はあ、まさかこんなところでお風呂に入れるなんて……」

「だいじょうぶー、ミッションのこともわかってるー。

…せっかくだし、ゆっくりしようよ」

「…あ、さっきの話？」

お風呂一緒に入りたいか、入りたくないか、みたいな？」

「それねー……」

カスミ、お風呂のお湯を手で掬ったり、遊び始める。

「(ぼそっと) ……たまには、一緒に入りたいかな。

もちろん、毎日じゃなくてもいいけど」

「…あー、こんなこと初めて言ったかも。

なかなかそんな話する機会もなかったし」

「うん。私たちって付き合い合っても仲のいい友達って感じで。特別そういうラブな感じはなかったんだよね」

「サバサバしてたわけじゃなくて (笑)」

二人とも極端に恥ずかしがるっていうか…。

スキンシップに慣れてなくて」

「どうしたらいいのかなあって考えてたんだよね、最近」

「(笑って) そうだね、今はスキンシップしないと、ここから出られないもんね」

カスミ、私に近づいていく。

「悔しいけど、ちょっと背中押してもらってるかも」

カスミ、私に軽くキスをする。

「（口を離して）そういえば、馴れ初めとか、ききたい？」

カスミ、私と会話しながらキスをしていく。

「（キス）高校でクラス離れてから疎遠になって…（キス）でも私はずっと気になってて…（キス）」

「離れてから意識し始めた。

でも友達だし、女の子だし、こんな感情抱いちゃダメかなって」

「（キス）大学に行ったら忘れられると思ってたのにさ。

…再会しちゃった。そこからはもう、止まらなくて（笑）」

「（キス）ふふふつ、一年かけて落としたってわけ！」

「えー？ 何したかって？」

……んー、私からばかりしてるから…。

そっちからしてきたら答える」

少し躊躇う間の後、

私、カスミにキスをする。（キスを受けたリアクション）

「んっ。えーっと、選択科目の授業合わせた」

私、カスミにキスをする。（キスを受けたリアクション）

「一緒にサークル入った！」

私、カスミにキスをする。(キスを受けたリアクション)

「はい(笑) あー、毎日連絡した！」

私、カスミにキスをする。(キスを受けたリアクション)

「お揃いの服買った！」

(キスされる) 一緒に勉強した！

(キスされる) えーっと、あー。

(キスされる) んっ！ あ、あ、はい！ デート！ いっぱいした！」

私、カスミに長くキスをする。(キスを受けたリアクション)

「んっっっ！」

(キスされながら笑う) ふふふっ、全然いいないえな(笑)」

「ふふふっ、だめ、

なんか、私の嬉しかったこと言っただけだ(笑)」

ドアの施錠が解除される音が響く。

「あっ、終わった。

…うん、そう。

…落としたっていうより、一生懸命頑張ったって感じ…だったかも」

「もー、見栄張ってるのかないから！ ないから！」

「ってか、寒っ！

タオルとかドライヤーとかないのかな、ここ……。このままだと風邪ひく…」

タオルとドライヤーが天井から降ってくる。

「わっ！　なんか、上から降ってきた！」

「え！　うそ！　タオルとドライヤー！
わー！　ありがとう！」

「これ、着替えとかも…？」

着替えが天井から降ってくる。

「おおっ……。

頼めば出してくれるんだ…」

「…これ、もしかして、
まだ続くから、サービスしてくれてるのかも」

「…ありうる。

まだまだ、先は長そうだね」

カスミと私、部屋の扉を開けて次の部屋に行く。

【STAGE03：とぎめきパンチドランカー】

○白い部屋（中央にソファー）

部屋を移動した二人。

着替えた二人はバニーガールのコスプレをしている。
部屋の中央にはソファーとローテーブルがある。

「…ねえ、着替え貰ったのはいいけどさ。
……どうしてバニーガール？」

「結構際どくない？
ほら、うしろとか……。ほはお尻って感じ」

「…えっちだ、えっち。
でもこれはこれで、眼福かも…。
（ぼそっと）焼き付けておこ」

カスミ、私の周りのぐるぐるしてみる。

「ちょっとー！逃げないでっ！
だってかわいいだんもん！
こんなえっちなバニー姿、なかなかみれないし！」

「まあ、戯れはこの辺にしておいて…。
この部屋、ソファーがあるだけで他になにもないけど…」

カスミと私、ソファーに座る。

「紙、そのテーブルの上にあるね。
（私から受け取って）ありがとう。えー、今回は…？」

「（紙を読み上げて）ミッション…酔った状態で、
いろんな場所にキスしてください」

「酔った状態…？
お酒もないのに？」

その時、何かが弾けるような音がする。（指ぼっちんにリバーブ？）
カスミ、なんだか酔っ払ってくる。

「な、なに？ 今の音…」

「ん、お、あ、あれ…？ あれれ……」

カスミ、私に寄りかかる。

「ご、ごめん。寄りかかっちゃった。
身体がなんかぼーっとしてきて…。」

（自分の状態を理解してきて）え？ あれ？ そういう？」

「…うん、えっとね、何がなんだかわからないけど、
私…：うん…：えへっ…：もうわかんない（笑）」

カスミ、私に抱きつく。

「ふふふっ、楽しい気分になってきちゃった」

「フリじゃないもん！
ほら触って？ 熱いでしょ？ からだ。
ふふふっ」

カスミ、私のうさみみを触る。

「ね、ね。なんで、うさぎさんの耳生えてるの？ かわいいー。ぴょんぴょん。ふふふっ」

「可愛い子が可愛い格好しているとか天才すぎる。知ってる？ この可愛い子が私の彼女なんだよ？ どう考えてもやばいでしょ」

カスミ、うさぎの耳から私の本当の耳を触り始める。

「(片方の耳を触って) こっちの耳もかわいい」。

(触って) 耳たぶすき。ずっと触ってみたかった」

「ん？ んん？ くすぐったい？

ふふふっ、モジモジしてる」

カスミ、回り込んで。

「反対も触っちゃおっと。

(片方の耳を触って) ふにふにー。

はあく癒される」

「…ん？ ミッション？

なんだっけ…？ もう覚えてない (笑)

(きくように) え、覚えてる？」

「…言ってる？

…うん。…うん。ん？

えー、いろんなところにキスするの？ していいの？」

「(耳元で) じゃあ、しちゃうね。しちゃうよ？ しちゃうよ」

間。

「（焦らしの間があって耳元で）……すき」

カスミ、私の耳にキスをする。

カスミ、回り込んで

「反対も…」

カスミ、私の耳にキスをする。

「ふふふっ。耳、弱い？ ちょっと声出た？」

「ふーん、気のせいなあ」

カスミ、正面で私の両耳を触りながら

「ほんとに気のせいかなあ…？」

カスミ、触りながらそのままキスをする。

「（口を離して）ふふふっ」

耳を触った状態で、キスをする。

「すきー。すきっ！」

私の顔周りにキスをいっぱいする時間。

途中でドアの施錠が解除される音が響く。

が、止まらずにキスを続けているカスミ。

「ふううー、満足」

カスミ、私に寄りかかる。

「（ちょっとした間があって寝息を立て始める）」

カスミと私、部屋の扉を開けて次の部屋に行く。

【STAGE04：涼やかな午後とリメンバーキッス】

○白い部屋（旅館）

部屋を移動した二人。

前の部屋とはうって変わり、外もある（ように見える）
旅館の一部屋の空間。

※まだバニーの姿である

「……うう……。頭痛い」

「さっき、変なことしてなかった？ 私」

「うん……。」

記憶ないんだよね：

酔っぱらった？のは覚えてるけど……」

「ん……？ 顔、赤い？ 大丈夫？」

「え……？ あ、私、結構……。」

そう……：激しかったんだね、私……」

「酔っぱらうと、人にくっ付いたりする方ではあるけど……」

「え？ たらし？

ちよっと、なんで！」

「付き合ってから記憶なくすまで飲んだりしてない！ほんと！」

「……うん。なんか昔、サークルの飲み会で私が酔いすぎちゃって。迎えに来てもらったんだけど、すごく心配させて」

「そこからもう、家でちょっと嗜むくらいにしてる。……うん。お酒なんかで、大事なものがなくしたくないし」

「久しぶりに気分だけでも酔えて楽しかった（笑）ふふふっ、そうだね。」

これで同じ、記憶ない仲間（笑）」

すこしの間。

「また全然違う場所にきたね。脱出できた……わけではなさそうだけど」

カスミ、歩いてベランダの方へ。

「ガラスの向こう、外がみえるね。おー、……海だ……」

「（ガラスに触って）ここが開いたりはしない、と。しかしなんか……。んー、ここ見えるあるような……」

「あ！ わかった！ そうだそうだ！」

カスミ、私のところに戻ってくる。

「ここ、大学一年の時に旅行で泊まった旅館！」

「……うん、夏休みにさ、必修で仲良くなった友達とみんなできて……。そう、まだ恋人になってない時」

「どうしてここなんだろ……」

カスミ、テーブルの上にある紙を取って眺める。
間。

「……なんかさ、ちょっと気づいたことあるかも」

「気になる？」

「じゃあ、……おいで？」

カスミ、座って膝枕を受け入れる体勢になる。

「ひーざ。ひざまくら」

「次の、ほら、紙に書いてある。

（読み上げて）『膝枕しながら、キスしてください』だって」

私、カスミの膝に頭をのせる。

「ふふふっ、この角度から顔みるの新鮮。
そっちもそうでしょ？」

私、横を向いて

「あ、目、そらした（笑）」

カスミ、私の頭を時々撫でながら会話する。

「……どう？ 膝枕。

懐かしいかんじする？

うん、大きくなってからはあんまり機会ないよね」

「……この場所、私の記憶に結びついてる気がする」

「掃除用具のロッカーも、お風呂も、この旅館も。ぜんぶ一度経験したことなんだよね」

「……え、バニー？」

（恥ずかしそうに）バニーは……。バニーも、です」

「……。正確には記憶に、私の欲望が混ざっている」

「あの時キスしたかったな、とか、イチャイチャできてたらな、とか……」

「……はい。すけべなんです。すみません……」

「……私の内なる欲望が作り出してるなら、記憶がないのも納得するとうか……。だって、私の頭の中ってことでしょ？ これ」

「だとしたら多分、私の欲望が満たされれば、脱出できるのかも……」

「この膝枕も、……そうだね。」

二人つきりになったときにじゃれあって、してあげたんだよ」

「そっちは何ともなかったかもしれないけど、こっちはもう、穏やかじゃない（笑）」

「だって好きな人の顔が膝の上にあるんだよ？ 想像してみて？」

「……そんなの、無理だよ」

カスミ、私を振り向かせて、優しくキスする。

「…したかった。こんな風に」

ドアの施錠が解除される音が響く。

「もうちょっとだけ付き合ってもらうかも……。まだ次の部屋、ありそうな気がする」

「……うん、ありがとう」

「着替え、出してもらっていい？
さすがにバニーのままじゃ恥ずかしいし」

着替えが天井から降ってくる。

「あ、最初に来てたパジャマだ（笑）」
「…うん、こっちの方が落ち着くね。
着替えよ？」

カスミと私、部屋の扉を開けて次の部屋に行く。
（扉がふすまになっている）

【STAGE05：ふたりぼっちのラビリンス】

○白い部屋（カスミの部屋の再現）

ふすまあけて部屋を移動した二人。

そこは白い部屋ではなく、カスミの部屋だった。

「…え、あ」

「…あ、いや、ここ…：私の部屋」

ふすまを閉める。

「脱出したってことになるのかな、これ…？」

「…：。あ、違う。」

壁にいつもの紙が貼ってある。

となると、私の部屋っぽくした場所ってどこか」

カスミ、紙を剥がして

「…：あれ？何も書いてない。
ほら、白紙」

「ミッションも自分たちで考えろって話…？
なにしたらいいんだろ。」

今までの流れでいくとキスは、するとして…」

「…ん、あ、ベッド気になる？
ちよっと大きいでしょ？これセミダブル」

「いつも一緒に寝てるんだよ、ここで」

「…うん。」

まあ最近ほぼ同棲みたいな状態だから」

「寝るポジションは、普段そっちが壁側の左で…。
私が右」

私とカスミ、ベッドに座る。

「……はあ…。」

やっぱり自分の部屋は落ち着く…」

「……このベッドで私は、いつも悶々としてた」

「だって一緒に寝ているのに、触れられない…。」

おはようのキスも、おやすみのキスもしたいのに、できない…」

「ほんとに私たちは、その、きっかけがないというか…。」

キスするとか触れ合うとか、

そういうこと、ちゃんと話さなかった」

「…楽しいの、一緒にいるのは、楽しい。」

ふざけあったり、友達みたいな距離感でいるのも好き」

「でもそれとはまた違う部分で、…欲しいの」

カスミ、私の髪をかきあげる。

「（見つめる間）……」

「欲張りだけど…、欲張りだから…恋人なんだよ？」

カスミ、私にキスをする。

もう一度キス（長め）をしてると

「（体勢を崩して）んっ、んっ」

カスミ、キスしたまま、壁に手をつく。

「（口を離して）…ちょっとよろけた。
手、うしろにまわして…？」

カスミ、私にキス（2回）をする。

「…体勢変える。寝て？」

カスミ、私を寝かす。※覆いかぶさるイメージです。

「…。すき」

カスミ、私にキスをする。

「…すき（キス）…すき（キス）
…すき（キス）（キス）」

「反対側も…。

…すき（キス）…すき（キス）
…（キス）（キス）…すき」

「……。こんなにしたことない、今まで」

「……不思議だね、どれだけキスしてもまたしたくなる。
（キス）」

二人、ベッドに横になる。

「（笑う）ふふっ……」

「あ、ごめん、特に意味はないんだけど（笑）」

「…キスって、こんなに幸せな気分になれるんだなーって」

「……今回のミッション…。」

結局、わかんないままだね」

「…もうさ、決めちゃおうか。

そう、勝手に（笑）」

きっとそれが正解だよ」

「んー、今回のミッションは…、は……」

「これからも二人がずっと続くようなキスをしてください……とかは？」

二人、向き合って

「なんか、誓いのキス、みたいだね」

「こんな私だけど、これからも、一緒にいさせてください。

（ぼそっと）……愛してる」

カシミ、私にキスをする。

ドアの施錠が解除される音が響く。

「（寝息を立て始める）」

しばらくすると寝息を立て始める。

【エピソード】

○カスミの部屋（朝）

朝。窓の外から鳥の鳴き声が聞こえる。
元の世界に帰ってきた二人は部屋の中で寝ている。
目覚ましのアラームが鳴る。

「（目を覚まして）ん、んんんんん。
……んー、うるさいよお」

カスミ、スマホを手にとって止める。

「……はあ。止まった。
……おはよう」

「……ここは……（見渡して）私の部屋、だ」

「質問。あなたは私の恋人？ ……イエス？
記憶なくしたりしてない？
ほんとに？ 私のことわかる？

「オーケーオーケー。
あー、よかった」

「え…、いやなんか、変な夢みちゃってさ」

「…うん。
…どんな夢だったかは……おしえない」

「ふふっ、だめ、いわないです。ふふっ」

「え？ 夢？ そっちもみたんだ？」

「当てよっか？」

（いたずらっぽく）……えっちな夢でしょ」

「えー？ 違うの？」

あ、でもその否定の仕方、怪しい…。

私の夢は全然？ えっちなじゃなかったよ？
ふふふっ」

「……時間？」

結構すぎる。

そろそろ起きないと。一限遅刻しちゃう」

二人、起きようとする。

「…あ。ちょっと待って。

（白々しく）やっぱりまだ私、起きない」

「んー…とね……。

（小声で）……キスしてくれたら起きる」

「（今度は聞こえるように）キス。…してくれたら起きる。
それまでベッドから出られない」

「（キスの間）……」

私、カスミにキスをする。